

古典教材『宇治拾遺物語』についての一考察

——「こぶ取りの話」を中心にして——

県立高田北城高等学校教諭 早 津 秀 雄

I はじめに

国語教育の本質に基づいて、どのような教材を選び、どのように指導法を改善し開発したならば、創造的な思考力や表現力を養うことができるか。このような観点に立って新しいくふうをこらし、生徒の発達段階に応じて、どのようなアプローチのしかたで指導していったらよいかということが、こんごの国語教育の重要な課題ではなからうか。

古典教育も、従来のオーソドックスな方法で、往時の有識者層の手になる有名作品の艶なる香気に浸っていたり、またはその教訓に満ちた枯れた味わいにのみ心を奪われておられようか。それどころか、民族の貴重な文化遺産としての古典の意義を再認識し、無限の芸術性や思想に触れて、豊かな人間性を育成しうるような指導上の理念や発想法をもたねばなるまい。

したがって、古典教材は「古典としての価値が高く、生徒に親しみやすいものを……精選」し、古典と現代との断層を埋めてくれるものでなければならないと思う。そこで、「昔と今とを現実的に結合」させるものをもっているのが説話であり、「歴史的伝承（伝承そのものが創造）の最も生命的な形式」（三木清著『構想力の論理』）をもつものとして、説話文学をあげることができよう。（昭和40年度検定本には、古文入門のための教材として『宇治拾遺物語』の中から15冊、『今昔物語』の中から4冊、その他の説話の中から4冊も採用されている。——「高等学校国語科資料『教材と指導法』・文部省」——）

説話文学（『宇治拾遺物語』）を、文字による記載文学と話しことばによる口承文学との両面から捕え、古典へ導入しようという意図（使用した古典乙Ⅰのテキスト・筑摩書房）は新しい問題点を提示し、従来の欠陥を是正し克服しうるものをもっているのではないかと思う。そこでかかる意図をくみ取り、一つの実験的な古典の学習指導法を試みこんごのあり方を考察しようとしたのである。

II 研究の構想

1. 目 的

1. 診断テストによって、事前に生徒の国語学力の実態を客観的には握し、古典学習の成果を実験的に追跡調査して、進歩向上の度合を計る尺度とする。
2. 古典学習への積極的な意欲を喚起させるために、導入にあたって適切な教材によって効果的で能率的な指導を行ない、基礎的な読解力を修得させる。
3. 古典教材『宇治拾遺物語』の「こぶ取りの話」を中心にして、伝承的・説話的発想の文学に、

既知の昔話をとおして生徒に興味と関心をいだかせ、視野を拡大し創造的な思考力表現力を養い、古典の意義を再認識させる。

2. 方 法

1. 被験者・期間 本校1年女子普通科100人(A組50人B組50人), 6月末~7月初, 6時間。

2. 実施方法

(1) 診断テストの実施 ①潜在的能力, 知能検査(教研式) ②現実的能力, 高校入試テスト, 国語学力検査(教研式), 導入時のテスト(古典乙I)

(2) 統制群法(Control group method) ①2群を等質化してA組を実験群, B組を統制群とした。②実験群には実験因子(「こぶ取りの話」特別指導3時間, 放課後の補習3時間, 機能的文法学習)を普通の古典乙Iの学習と並行して行ない, 統制群には普通の古典乙I「徒然草」の学習を行ない, 「こぶ取りの話」は問題点を指摘して, 家庭学習をさせた。③追跡調査のために両群とも学習後, 古典乙I・「こぶ取りの話」のテストを実施し, リポートを原稿用紙5枚にまとめさせた。

3. 学習の展開(実験群 A組)

(1) 「こぶ取りの話」について, 生徒にいきなり『宇治拾遺物語』にとりつかせず, 既知の昔話などで, 知っているこの話の内容に興味をいだかせ好奇心をかきたてる。そこで生徒が, ただ現代語訳のみではものたりなくなり, 古文を楽しみながら読解し鑑賞力批判力を修得するよう, 導入にあたって留意する。

(2) 予習では読みを重視し, また古老などから昔話を聞き地域社会に関心をもたせ, 民族の文化遺産について再認識させる。

(3) 学習活動では, 内容構成語句語法など古文の基礎的な理解につとめ, 説話文学の意図している点を捕えさせる。

(4) 語り手, 編者が特に気をつけて語っている点とか, 翁や鬼などについて, 非科学的非合理的な, いわば伝統的精神の矛盾相克などに留意させる。だが説話がたとえ虚構であっても, 時代を超越し真実を追求しようとしている「尊くある話」として, 庶民の素朴な人間性が展開されていることについての理解を深めさせる。

(5) 『宇治拾遺物語』の「こぶ取りの話」について, 既知の昔話と比較したり批評したりして感想をリポートにし学習のまとめとする。

Ⅲ 診断テスト (Diagnosis Test)

1. 潜在的能力 (Potential ability)

1. 知能検査(教研式) A式(言語式)とB式(非言語式)を併用したものを, 最も発達が著

しい高校入学時、すなわち1.6才前後の生徒を対象にして実施したものである。両組とも全国の理論的比率よりもまさる(表1-1表参照)が、国語学力検査(教研式)と比較(成就値=知能偏差値-国語学力偏差値)すると、マイナスがA組70% B組68%もあるのは悪い。また、IQが110以上ないと大学進学がむずかしいとされているが、IQ110以上がA組66% B組60%とすぐれている。だがIQ90程度で高校での学習が困難なものが、A組2%もあり悪い傾向を示している。両組は等質であり、所要時間50分。

○診断テストの結果(表1)

2. 現実的能力 (Actual Ability)

1. 高校入試テスト 昭和42年度、高校入試テストの全教科(9科目)の総合成績について、成績のよい得点順に配列して5段階に評価したもので、両組とも等質である。(表1-2表参照)

2. 高校新入生国語学力検査(教研式) 高校での国語学習を、より合理的効果的に推進するために、国語の基礎学力を測定しようとしたもので、両組とも等質であって、全国平均点46.2よりもやままさる。所要時間50分。(表1-3表参照)

3. 導入時のテスト(古典乙I) 事前に古典学力の実態をは握して、効果的に古典学習を展開しようとしたもので、両組は等質であり、所要時間50分。(表1-4表参照)

評価段階	潜在的能		現 実 的 能 力							
	1 表		2 表		3 表		4 表			
	A組	B組	A組	B組	A組	B組	A組	B組	A組	B組
5	8	0	6	5	2	0	3	1		
4	28	33	12	7	19	15	14	12		
3	13	17	11	13	26	31	18	14		
2	1	0	16	17	3	4	14	20		
1	0	0	5	8	0	0	1	3		
計(人数)	50	50	50	50	50	50	50	50		
平均点	58.0	55.9	22.70	19.40	53.8	51.9	49.0	46.3		

○A・B組の有意差の検定(Utestによる)

潜在的能力

1. CR=1.37 $P>0.05$ (ns)

現実的能力

2. CR=1.13 $P>0.05$ (ns)

3. CR=1.15 $P>0.05$ (ns)

4. CR=1.40 $P=0.0808>0.05$ (ns)

以上、診断テストはいずれも4月~5月にかけて実施し、A・B組が検定によって等質であり、有意差が認められないことが明らかになった。そこで、事前に客観的に実態をは握することができたので、こんごの古典学習の成果を実験的に追跡調査するための、てがかりとすることができたのである。

○追跡調査の結果(表2)

IV 追跡調査 (Research for pursuit)

1. 学習後のテスト(古典乙I) 1学期の終了時に、両組とも普通の古典学習「徒然草」の基礎的なことがらについてテストを行なった。導入時のテストと比較すると、平均点が56点、55点で両組ともかなりの成果は認められたが、このうち文法問題ではA組59% B組64%と、A組が伸びなやんだのは、機能的な文法学習で文法全般に渡っていて、直接テストの問題に触れる機会が少なかったからである。50分、両組は等質。(表2-1表)

評価段階	1 表		2 表		3 表	
	A組	B組	A組	B組	A組	B組
5	7	5	5	3	6	2
4	12	12	13	10	10	8
3	22	19	17	19	19	21
2	9	14	13	13	13	14
1	0	0	2	5	2	5
計(人数)	50	50	50	50	50	50
平均点	56.7	55.5	45.8	41.0	62.0	54.2

○A・B組の有意差の検定(utestによる)

1. CR=1.15 $P>0.05$ (ns)

2. CR=1.14 $P>0.05$ (ns)

3. CR=1.762 $P<0.05$

2. 「こぶ取

りの話」テ

スト

所要時間50

分。両組は

等質である。

(表2-2

表参照)文

法や昔話な

どについて

は低調で、

期待した成

果は余り得られなかった。(表3参照)

3. 「こぶ取りの話」レポート 「こぶ取りの話」について、上位(評価段階5・4のもの)の生徒のレポートの中から気づいた点をあげてみた。

- (1) 学習によってなにを得たか。——「高校生にもなって説話(昔話)を学ぶんだってばかっているのではないか。」しかし学習が進むにつれて「再び幼時の昔話や童話を思い出した。一見単純でつまらなそうな昔話の中にも、こんなにもわたしたちに訴える真実がかくされていたのかと、むしろ驚嘆し後世にまで伝えなければならない」といっているのである。「あまりにも科学的に合理化され過ぎて、せっかくの文化遺産をなくしてしまわないように」と心配さえている。また古典への興味をかきたてられ、「古典の中にははかり知れないものがひそんでいるような気がしてならない」としており、古典の貴重な意義を認めようとしている点が注目される。

(2) 語り手編者について気づいた点。——「新興階級の手になる新鮮で自由な文章」にまず注目しており、こういう話を生み出した人々(語り手)は、「どこかこれと似た劣等感をもっていて、そういうものから抜け出したいという希望をもっていたのではないかと、庶民の気持ちをつかもうとしている。また昔話(民間説話)は「尊くある話」で、「そこにたまらない面白さがあり、心のよりどころを伝えようとする伝統的精神を育成し、長く生命を持ち続け庶民の希望や知恵を生き生きと素朴な口がたりでかたっている。」としている。また編者が「貴族であっても、一般庶民の心を読み取り、庶民を対象にして文学を作り出していること自体すばらしい。」そして文学に庶民を登場させることによって「新鮮でたまらないおもしろさを引き出すことができる」と。また編者の意図も「長く生命を持ち続け、魂の故郷となるもの」との願いによったとし、一つの教訓「こぶ取りの話」によって「みんなに理解させようと積極的に他人思いでものの道理を解し、慎重でしかもユーモアを解し明るく健康な人」といっているのは、まさに的確な評といえよう。

- (3) 鬼、翁について。——超人間的な力をもつ鬼の登場は「庶民の期待に答えて、翁の劣等感を取り除いてやった。しかし人間と同じような言動をし、こぶは幸運をもたらすとか、質にとった

正答率	用 例						全 体	備 考	
問題 1	むね	する定なり	折敷	くせせる	よき	すしりもしり えい声を出して		語句の解釈	
A 組	76.0%	89.9	30.0	32.0	60.0	77.8	60.1		
B 組	74.0	89.0	26.0	30.0	57.0	76.0	58.0		
問題 2	ゐ	くどき	笑みこだれ	奏					文法的説明
A 組	30.0	42.0	2.0	40.0				30.0	
B 組	29.0	38.2	7.0	37.5				29.6	
問題 3	土器始まりて	御遊	物のつきた りけるにや	さもあれ	さてありなん	鳥帽子の・翁の		語句の説明	
A 組	74.0	4.0	48.0	48.0	52.0	46.0	45.4		
B 組	70.0	2.0	46.0	45.0	50.8	42.0	40.1		
問題 4	鬼に気づいた点 (A組 40.0 B組 36.0)		問題 5	翁の心の動き (A組 43.5 B組 42.5)		問題 6	編者について (A 組		
61.2 B組 56.0)		問題 7	語り手について (A組 22.4 B組 20.0)		問題 8	昔話が役立った点 (A組 31.2 B組 30.0)			

りするところはおもしろい」とか、鬼は大変恐いものとされているのに「ここではむしろ滑稽にさえ感ぜられるのは、語り手の奇抜な説話的発想によるものか」としている。また翁については、「人間は大変ひがみ根性が強い。こんな容姿がいやだ。人があじたんだから自分だってとか。こぶがあるから人とつきあうのがいやだからとか」と、心の広い外面など気にしない人間にならねばならないとし、こぶを持っていないで幸せだと自己反省している。さらに右のこぶのある翁の機知や知恵を「悪知恵を働かせたのではないか」として、左のこぶのある翁が「たとえ歌や踊りが幼稚だとしても、あえて鬼の恐ろしさも忘れてでかけたのに、こぶを2つもつけられるのは」と、むしろこの翁に同情さえして『ものうらやみは、すまじきことなりとか。』という教訓的なものに、反発さえ感じていることは大いに注目に価する点ではないかと思う。

以上、追跡調査のレポートについて主要な点をあげてみたが、レポートにまとめることによって生徒の学習成果のまとめにしようとしたものである。その結果、テストや日常の学習にあらわれていない、より多くの定着化された成果をレポートによって発見することができた。たとえわずらわしくとも、レポートの要を強調したい。したがって指導を加えたA組の有意差が認められ、成果があがったとみることができるのであって、A、B組は等質ではない。(表2-3表、参照)ただまことに遺憾なことは、作文にまとめることにすら抵抗を感じている下位(評価段階1、2のもの)が、A組30% B組38%もあるということで、これは無視できない。

V おわりに

短期間でしかも実験的な試みであっただけに、所期の目的をすべて果たし得たとはいえない。それどころか、こんごに残された問題が余りにも多いのである。逐次こんごの研究によって解明していきたいと思う。一応の成果としては、

1. 診断テストを実施することによって、生徒の潜在的な能力と現実的な能力とを比較したり、実験群と統制群との有意差を検定したりして、事前に生徒の実態を客観的には握ることができた。したがって、以後の古典学習の成果を実験的に追跡調査し進歩向上を計る尺度として活用することができたので、学習活動を展開していく上でひじょうに役立った。
2. 学習の成果を定着化するためにレポートによるところ大なるものがあるので、レポートによって学習した客観的知識を記録し、生徒に主体的な自己表現をさせるために資料を収集し検討し構成させて、創造力表現力を修得させようとしたのである。日常の学習やテストなどでは両群の顕著な相違は認められなかったが、「こぶ取りの話」のレポートについては、特別指導を行なった実験群においては顕著な成果を認めることができた。
3. 説話文学が古文の導入時に必要であり、生徒に内容面から興味をいだかせ抵抗を排除し意欲を喚起せしめるものをもっているだけに、既知の昔話などによって「こぶ取りの話」への導入を容易に行なうことができた。したがって話の内容とか登場人物、または伝承的な真実をくみ取ったり、語り手や編者の意図する点については十分に理解を示してくれた。

結局、説話文学は口誦伝承による説話を文字によって定着化し、庶民が素材であり享受者となり創造の荷担者となってきたものであり、いわば庶民文化を代表するものであった。ことに『宇治拾遺物語』はたんなる教訓的なものではなく、王朝の物語文体で寛容な態度で人間理解につとめ、素朴で、おおらかさの中で一種あきらめにも似たくったくのない笑いをかもし出している。そんなところが、生徒の共感と呼び好奇心をかきたてたのではなかろうか。

こんごの研究課題としては、

1. 実験的な追跡調査の試みが、生きたことばとともに語り考え調べ創造する集団学習にのみ終始しているのではなくて、個々の生徒にも波及させていく。
2. 作品の内容にそくしてよりよく読解がなされ古典学習の目的が達成されるよう、全体的な見通しの上に立って計画的に、機能文法の指導法を開発していく。
3. 生徒に意見を発表させ検討させたり、メモやレポートなどを推考し、グループごとで問題を解決させたりして、いわば集団思考によって表現力や批判力を修得させるためのデスカッションを行なう。
4. レポートの評価を評定尺度法をもちいて、評価の観点（主題・目的・冒頭・段落・構成・文・用語・用字・記載・内容）の重要なものをそれぞれ分析し、その観点ごとに分析的に5段階に評価してそののち全体の得点をきめる。（その時には、複数で第三者の教師によって評価が行なわれることが望ましい。）すなわち、作文の基本的な指導によってつちかわれた創造的な思考力や表現力を客観的には握していく。
5. 説話文学は、書承という伝承的発想（時間的）にたよりながらも、口承という説話的発想（空間的）を通して常に文学としてのいのち（創造性・芸術性）を新たにしてきた。その更新の活力は、常に地域的庶民的な平俗性につながる生活環境から生まれた、口がたりのものの見方考え方によるものであった。それだけに、口がたりのもつ生命力や素朴な美しさを昔話（民間説話）などを通して、生徒に再認識させる。あわせて、昔話の持つふん囲気を絵本の絵とか色という形象化されたものでしか受けとめられなくなっている生徒に対しては、読書領域の深化と拡大につとめ、古典のもつ真の意義をじゅうぶんに理解させ、言語文化の領域を拡大し、言語生活の向上をはかっていく。